

# 活動紹介 聞き書きプロジェクト『MEMOKKO』

めもっこ



基本的に「お茶っこ」に近い形になりやすい

震災直後から数ヶ月のあいだ、生死のはさまの極限状況のなかで、よそ者であるボランティアは、どう動けば地域のためになるか？

本当に必要な支援をするために、「とことん「聴く」ことを始めたら、やがて話し手の生き生きとした表情に触れ、地域文化やその人自身の歴史に触れ、「もっとお話を伺いたい」と思うようになりました。

被災体験をお聞きするのではなく、津波で流されてしまった『形あるもの』にかわり、みなさんの記憶と心の中にある宝物を聞いて書き残して、次の世代に伝えるために、この活動は始まりました。

聞き書きのエキスパートである、都留文科大の高田研教授、同志社大学の西村仁志准教授に教えを乞い、手探りで活動を始めたものの、話を聴くボランティアも素人です。当初は方言の聞き取りに苦労したり、マニュアルに頼るあまり話し手が本心に話したかったことが聞きとれないこともありました。



ゆかりの場所でお話を伺うこともある

十月には聞き書き希望のボランティアを募り、高田先生による集中研修、賛同者からのアドバイスをいただきながら話しあいを重ね、今までの何が問題だったのか、その具体的な解決方法は何か、このプロジェクトの最終着地点はどこにするのか、などの課題を一気に見直しました。

そして、今まで以上に「とことん聴く」を実践した結果、「聞き書き」は聴き手にとって素晴らしい体験となりました。

お一人お一人の話の魅力と同時に、この地域にもともとあつて、震災によって顕在化した過疎高齢化、産業の斜陽化などの問題にも向き合おうとかけつけました。

RQが緊急支援期を脱したあとも、聞き書きプロジェクトは現地に訪問してお話を伺い、それを逐語録に起こして本にまとめるという活動を継続しています。

「私も現地に行ってお話を伺いたい」現地には行けないけれど、音声データをテキストに起こすことならできる」という嬉しいお申し出も頂けるようになりました。これからの長い活動を継続していけるよう、チーム一同、努力を続けてまいります。

we support!



復興支援『すけきた』

「すけきた」とは



夏朝日

宮城県登米市あたりの言葉で「ボランティアに来たよ」という意味である。



←高田先生

熱い講義 VS 真剣なボランティア

## 生活復興支援

- 5/3 西表より黒糖6箱発送(最終便)
- 5/8 定期ボランティア説明会始まる
- 5/14 歌津センターで写真クリーニング開始
- 5/13 ボランティアバス定期運行開始
- 5/16 ボランティア受け入れ「Zシステム」運用開始
- このころより「元気箱」のお届け(お茶碗や包丁などをセットにして、仮設に暮らす世帯ひとつひとつに手渡すプロジェクト)
- 5/21-22 ロハステザイン展@新宿御苑 RQブース出展(まだまだボランティアが足りない!のアピール)
- 5/27 余語晶子さん西表から唐桑VCへ(5/29-6/5)「いちゃりばちょーでー」を流行らせる 次回「小荷朝日号」に続く



## ふりかえり企画

# RQ活動年表

「命を救う」という段階から「生活を立て直す」という未来志向へ支援の形が進んできた頃でした

## 生活再建支援